

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

年間テーマ「今こそ、戦争を未然に防ごう！」

Vol.
121

2026. 6



こんぼく いとまん こめす
魂の塔(沖縄県糸満市米須)

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

巻頭言

わたしの中の“トランプさん”と “高市さん”に向かって！



クラレチアン宣教会

たけのぶ しんじ
竹延 真治

聖週間の初め、受難の主日の典礼は、イエスのエルサレム入城の場面の福音朗読で始まる。棕櫚の葉ならぬソテツの枝を振って、歓呼の声でわたしたちはイエスを歓迎するが、同じミサ中の福音は受難劇の形で読まれる。会衆はイエスを「十字架につけろ！」と叫ぶ役を演じる。



イエスを歓呼の声でエルサレムに迎えながら、数日先にはその同じ人を死刑にするという人の心の豹^{ひょうへん}変ぶりをわたしたちは典礼で心に刻む。「わたしはそんな心変わりをするはずがない」と誰もが思うが、そうだろうか？

ヒトラーに同調して、たくさんのユダヤ人を殺す役に回った親衛隊長たちや強制収容所長たちは、平和な時代はごく普通の市民だったことが知られている。

生まれつき凶悪な人など誰もいない。この日の典礼はわたしたちの移り気な心を戒めてくれているのだろう。

イランに戦争を仕掛けたトランプ大統領や武器輸出へと舵を切った高市首相の姿勢は、イエスの教えに真っ向から背くものだとなわたしは思う。

もう、これは政治の問題だけにとどまらないで、命と平和を守れるかどうかの信仰の問題でもある。今までにデモに加わったことのないような無名の若者たちがペンライトを片手に街頭で「戦争反対！」「憲法9条を守れ！」と叫ぶ姿にわたしは信仰者の香りを感じ取ってしまう。

けれども、こうも思う。トランプさんや高市さんにとりついた悪霊は、トップの政治家だけでなく、一般市民のわたしたちをもねらっている。

現代の悪霊が世界中で今最も有効と考えている手段は、人々を分断と戦争へと駆り立てることだ。わたしたちは、自分の関わる家族や職場、学校、会社、ご近所、小教区（教会）などのあらゆる人間関係の中で、分断と戦争（紛争）を回避する技術と知恵を身につけていかなければならない。

そして、悪霊に「黙れ！出て行け！」と叫ばなければならない。トランプさんや高市さんに上手に取り入れた悪霊は全く同じようにわたしをもねらっていて、わたしを豹変させようとねらっているのだから。

ミサ中の手話を初め、情報保障について

教区聴覚障害者ボランティア会 藤井 真子

皆さんは耳の不自由の方ときいてどんな想像をされますか？ 聾^{ろう}といっても聞こえかた、一人ひとり多様なものであることをも知っていただきたいです。教会にいられて、色々な困り事があるのは聴者も聴覚障害者も同じです。



(聴覚障害者標識、ミミマーク、手話マーク)

最近では、市町村で行われるイベント等の開催にさいし、情報保障の為の、沢山の市町村等の配布資料があります。情報保障とは、障害の特性に応じた方法で、必要な情報を理解しやすく提供することを指します。

ミサ準備：障害の状態によっては公共交通機関の利用が困難であったり、一人で会場まで来ることが難しいこともあるため、事前に状況を確認し、必要な配慮を行う。

- ☆ あらかじめ参加者の障害の内容がわかっている場合には、案内や説明の工夫が行えるよう、司祭や奉仕者にその旨を伝えるようにする。
- ☆ 不特定多数の参加者が見込まれる場合、配慮には、手話通訳や要約筆記の配置、補聴援助システム(ヒアリンググループ等)の設置などがある。また、音声機能障害のある人のため、小さな会場であってもマイクが利用できるようにする。
- ☆ ミサ後の会議やイベントによっては、あらかじめ手話通訳や要約筆記などの配慮を用意する。また、代読・代筆者の配置を検討する。
- ☆ 要約筆記はその場での情報保障のための手段であり、記録を目的としたものではないので、議事録に代用しないようにする。
- ☆ 下図のようなコミュニティカード《兵庫県版コミュニケーション支援ボード参照》等を用意する。
一人ひとりが障害者理解、情報保障に関する研修を受けるなど、日常的に配慮を行う体制づくりも求められています。



《2025/6 手話施策推進法 施行》
障害のある人の意見を反映しながら運用・改善されていくことが望ましいとされています。

このように、教会にいられた誰もが安心して、教会全体で連携し、障害の有無にかかわらず、等しく情報を得られる環境の整備が求められています。

共にミサを通して神様への信仰を深めて参りたいものです。

※印刷用に日本語だけにしました。他の言語版は、web.pref.hyogo.lg.jpを参照ください。

レオ教皇(レオ14世)が最初のミサで述べられたお言葉「あなたに平和がありますように(Pace a voi.)」を伝えて参りましょう。

「6月23日」沖縄慰霊の日

あわせ けいご
泡瀬教会(沖縄市) 山田 圭吾

「沖縄慰霊の日」、「組織的な戦闘が終わった日」、「沖縄の終戦記念日」・・・様々に表現されるこの日、沖縄のカトリック教会では毎年「カトリック平和巡礼」を催行している。

「すべての戦争犠牲者のために祈り、平和を願う日」の行事として30年以上続けられている。カトリック信者だけでなく、キリスト教、仏教や他の宗教者の方、また特に信仰があるわけではないと言う方も、県内ばかりでなく、日本各地から参加しておられる。昨年は沖縄戦から80年とのことで、日本の司教団も大勢参加された。

出発地はカトリック小禄教会(那覇市小禄)。朝6時に「平和祈願ミサ」が捧げられ、魂魄の塔(糸満市米須)までの約15kmを巡礼する。小禄教会敷地内にある「フランススコ・平和の広場」には、沖縄で戦死した2人の司祭の名を記した杭が立てられている。

小禄教会・平和の広場の杭には戦死した2人の司祭の名前が

ジョセフ・コブル神父(アメリカ軍の従軍司祭/カプチン会修道会員)、日本人・森五百枝神父。

直接向かい合って殺しあったわけではないだろうが、同じカトリックの司祭同士がお互いを敵として戦っていたのである。普段は「愛と平和」を唱え伝える宗教者であっても、国家とか軍隊とかの組織の一員であればその思想信条とは別の力によって命を奪われることになるのだろうか。



7:00頃に出発。幼児から80歳代の沖縄戦体験者や参加者100名程がそれぞれの体調や順路の状況を考慮しながら歩きだす。



巡礼全体は、十字架の道行きを想定している。沖縄戦当時の逃避行を辿りながら、思いを馳せながら口ザリオを手に祈りや歌を捧げ歩く人もいる。歩き続ける。途中、三か所で休憩し、祈りと歌を捧げ、当時の証言を聞いて黙想し、再び歩き出す。



途中で合流する人もいて、延べ300人程の参加があるだろうか。年々高齢化による減少が気になることもある。しかしまた、ここ数年は県外から巡礼団として参加される方々もおられ、ともに平和を祈りながら巡礼することができることには続けることへの大きな慰めと励みにもなっている。

沖縄戦末期(振り返ることのできる現在からの表記であって、当時の人たちにとってはいつ終わるかわからない戦争状態の時期)の1945年6月、兵員も減り武器も食料もない日本軍と沖縄住民は、最後の激戦地と言われる沖縄島南部に追い詰められていた。

5月上旬から6月下旬にかけて、沖縄は梅雨の時期にあたり、足場も悪く雨の中を裸足で着の身着のままの避難行は難儀なことだったことだろう。現在の舗装され整えられた道の状況からは想像しにくいのはあるが、それでも「祈りながら歩く」ことの意義を思うのである。



平和の火

目的地の魂魄の塔では、祈りの集いがある。祈りと歌があり、証言が語られる。

そして那覇教区司教による「平和メッセージ」が宣言され、正午の時報に合わせての黙とうをもって日程を終える。

6月23日が「慰霊の日」とされているのには様々な思惑があるようである。

沖縄での戦闘責任者であり、沖縄住民多数を戦闘に巻き込んだとされる牛島満司令官の自決の日(他の日との説もある)を「慰霊の日」とすることに抵抗感を訴える人もいる。

その後も戦闘は続き、それまで以上の多くの犠牲者があったのだから「沖縄の終戦の日」との呼び方は嫌だと言う人もいる。

日本で週五日制制定の動きがあった頃、各県の条例で定められていた休日が廃止されることになり、沖縄の「慰霊の日」も廃止されることになりそうだった。しかし、沖縄戦の悲惨さと平和を希求する日としての慰霊の日は是非とも残すべきだとの県民の声があり、沖縄県の休日として定着している。

1960年代には、日本の各都道府県の立派な慰霊塔が建立され、各地から慰霊団の訪問があり、慰霊祭が執り行われていた。

45年後半の沖縄では遺骨収集もままならない(米軍の許可が降りなかった)時期に、民間人も兵士も区別なく集めた遺骨を窪地に納めてコンクリートで蓋をただけの場所が、「魂魄の塔」とされたとのこと。

銃弾や砲弾が飛び交う戦争当時、どこで死亡したか記録もない犠牲者の遺族は「魂魄の塔」の前で慰霊の祈りを捧げるのである。しかし、その遺骨も国は沖縄の遺族の許可を得ることなく平和祈念公園内の国立戦没者墓苑に移転したという。それでも「沖縄県の塔」とも言われる「魂魄の塔」での慰霊の祈りと平和祈願の行事が続けられているのである。

「沖縄からの声」のコーナーを今月号から再開いたします。今回は、山田圭吾さんに紹介していただきながら、色々な方の声をお届けできればと思っています。

《パウロ 山田 圭吾さんの自己紹介と私の歴史》

1954年沖縄生まれ(72歳)

カトリック泡瀬教会(沖縄市)所属

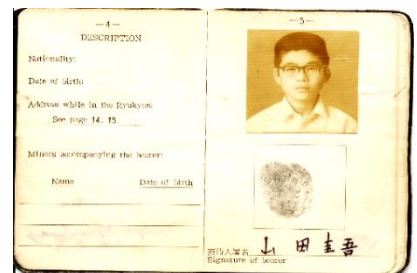
1952年4月28日 沖縄、奄美、小笠原の施政権が、日本国からアメリカに移譲された

1953年2月 鹿児島県出身の父と宮崎県出身の母が、結婚後すぐに沖縄に移住した。

1953年12月 父の故郷《本籍地》の奄美大島が日本に返還された。

1954年4月 真和志市(現・那覇市)に生まれ、石神 忠真郎神父(奄美大島出身、カプチン・フランシスコ修道会)により受洗。洗礼名:パウロ。

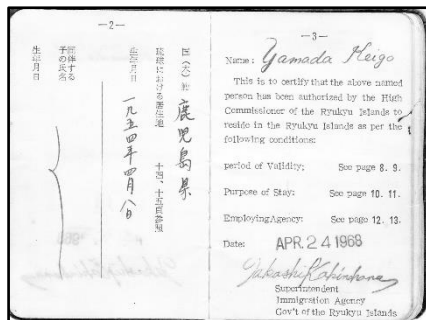
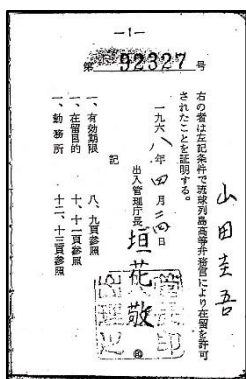
1968年4月(14歳) 沖縄統治の最高権力者である琉球列島高等弁務官により在留許可を受け、写真貼付、指紋押捺させられた「在留許可証明書」が発行される。第92327号。



常時携帯が義務付けられ、場合によっては強制退去の可能性。

1972年5月15日 施政権が返還され、在留許可証明書が無効になる。

沖縄生まれ、沖縄育ち、移住者二世、カトリック信者...日本から排除され、沖縄から排除された...さて、私はナ二人でしょう。



講演会「逆流の時代 今立ち戻るべき日中関係の原点とは」と 映画「豹変と沈黙～日記でたどる沖縄戦への道」から感じたこと

大阪梅田教会 すぎもと ひろみ 杉本 弘美

大阪梅田教会で洗礼を受けて3年、受洗直後から誘われるままに社会活動委員会に入り、募金活動等のお手伝い程度しかしてこなかった私が、今年は平和旬間に責任者として携わることに。

「平和」をテーマに何か企画しようとしても、自分が「何も知らない、何も分かっていない」事に気づかされ、少しでもヒントを得られれば、という思いで、5月2日(土)～4日(月) 阿倍野市民学習センターで行われた「アジアから問われる日本の戦争」展のメインイベント、ジャーナリスト木村知義さんの講演会「逆流の時代 今立ち戻るべき日中関係の原点とは」と、原義和監督の映画「豹変と沈黙～日記でたどる沖縄戦への道」に行ってきました。

講演会で話を聞き、映画を観終わって、私は現実を見誤っているかも知れないということに気づかされて愕然としています。

講演会の冒頭で木村さんは、「私たちは今、戦争が日常化していて、意識しにくくなっている」とおっしゃいました。確かに毎日のように戦争のニュースに触れて心に痛みを覚え、犠牲になって苦しむ人々のために、一日も早い戦争終結のために、と毎日祈ってはいても、どこか対岸の火事のように感じてしまっている自分があることは否めません。「まさか日本はもう戦争をしたりはしないでしょ」と呑気に思っていたのです。

今アメリカは、世界中に戦争を仕掛け、国を破壊し多くの人命を奪って、それを正義のためと豪語し、時に聖書の言葉まで引用して正当化しています。パパ様に非難されても、反省するどころか反発してますますエスカレートしています。国際法違反だと非難されても全く取り合いません。

そんな狂った指導者に日本の高市首相は、「より関係を深めたい」とすり寄っているのです。まったく恐ろしいことです。日本が自ら戦争を仕掛けることは無かったとしても、このままいけば、間違いなく戦争に参加する日が来てしまうでしょう。

台湾有事をめぐる高市首相の発言は、日本が米軍と共に武力行使に踏み切る可能性を世界中に印象付けたということです。そして中国があそこまで怒ったのは、1972年に調印された日中共同声明に盛り込まれた『台湾は中国の不可分の一部である』とする中国の主張に対して理解し尊重するという約束を全く無視し、中国に戦争を仕掛ける可能性がある事を示唆した発言と受け取られたため、という話もありました。

しかし日本の多くのメディアは、中国の報道官の激しい論調による非難を中心に取り上げ、高市発言の問題点にはほとんど触れていなかったと私は記憶しています。また、それを見た私たちは何を感じたのでしょうか。多くの日本人が「中国ってやっぱり恐ろしい国だ」と思ったのではないのでしょうか。しかし中国からしてみたら、「日本はまた戦争を仕掛けてくるのではないか」と戦々恐々とした気持ちになっているに違いないと思うのです。日本への渡航が制限されることになった背景には、中国が日本に苦しめられた歴史が繰り返されるかも知れないことに対する懸念と恐怖がある事は否めないのではないのでしょうか。



敗戦から 80 年経った今、戦後生まれの私たちの多くが、日本はアメリカに戦争を仕掛けて敗れたという認識を持っています。しかし、それ以前に日本は、中国、アジアへの侵略戦争を行い、中国、アジアの民衆から抵抗された結果、太平洋戦争に突入し、敗戦したという視座を持つことが大切だというお話もありました。

映画『豹変と沈黙』では、徴兵され、日中戦争で戦わされた 3 人の若い兵士が残した戦中日記を軸に、日本が中国でいかに残虐非道な行為をしてきたかが、赤裸々に描かれていました。

ごく普通の若者たちが、戦場では残酷な殺戮者となっていた現実とその中で彼のらの葛藤と苦悩は、日記の朗読とその言葉を書家が描き出す墨文字によって、ストーリーのある戦争映画よりも生々しく伝わってきました。



戦争の被害は語られますが、加害の部分が語られることはほとんどありません。かつて兵士だった人に話を聞くことはほぼ不可能になり、伝えられてもいないまま、私たち日本人は、過去に犯した過ちを葬ろうとしているのかも知れません。

1972 年に「日中平和友好条約」が締結され、国交が正式に回復した時、日本政府は中国に正式に謝罪し、中国がそれを受け入れ和解が成立したのです。余談ですが、日本人が大好きなパンダは、日本と中国の「友好と協力」の象徴として贈呈されたのです。

しかしその後の日本は、対中抑止を基本に日米同盟を強化し、2015 年には集団的自衛権の容認。さらに日米の軍事一体化をはかる安全保障関連法を次々と成立させ、中国と交わした約束をことごとく破り、中国を敵視するような行動を取ってきているのです。

そして今回の高市発言です。中国は怒っているというより、日本の不誠実さに呆れ、恐怖を感じて日本と距離を置くことにしたに違いないと私はやっとな気が付きましたが、目が開いている人ならとっくに分かっていることなのではないでしょうか。

中国を危険な国だと思っている日本人が沢山います。確かにそういう一面もあるのだとは思いますが、そこを考える前に、なぜそのように感じているのかを、今一度立ち止まって考えてみなければならぬ時が来ているのだと思います。

映画の中で、日記を残した元日本兵の息子である田中信幸さんが、「お父さんが参加したのは侵略戦争だったんじゃないですか？」と問いかけた時、決して首を縦に振らなかったお父様が、「犯した罪の責任は俺と一緒に背負うから」と言った時、大きく頷いたと語るシーンがありました。

過去に犯した過ちは無かったことにはできないけれど、心から悔い改め、糾明した上で、前に進むことはできます。1981 年、教皇ヨハネ・パウロ二世は広島で、「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです」と語りました。私たち自身は、戦争を起こしたわけではないけれど、日本が犯した過ちをしっかりと認めて、二度と同じ過ちを犯さない責任を持つ必要があるのだと強く感じます。

講演会の最後に木村さんは、どこかを敵に回す同盟をやめて、友好条約を結ぶことが平和への道とおっしゃって締め括られました。「日中平和友好条約」「日米平和友好条約」とても良いではないですか。

主は「隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ 22:39)と私たちに命じられました。ところで、私たちの隣人とはいったい誰なのでしょう？ やはり目を覚ましていなければ !!



「憲法9条」と「武器ビジネス」



フリーライター おおもと 大元 あさみ 麻美

現政権は「憲法改正」を悲願とし、「永久に戦争を放棄する」と決意した憲法9条にまで手をかけようとしている。4月19日、国会議事堂前には危機感を覚えた3万6000人もの市民が集まり、反対の声を上げた。また5月3日に東京都内で開催された「憲法集会」には5万人が集結した。かつてないほど多くの女性たち、特に幼い子どもを連れた母親たちが自らの意思で集会に参加し、手作りのプラカードを掲げて、「どの国の子どもたちも犠牲にしない」と反対の声を上げていた。

2月28日、イスラエルとアメリカはイランに侵攻し、イランの革命防衛隊はホルムズ海峡を実質的に閉鎖した。高市首相は3月中旬、訪米したが、その際にトランプ米大統領は高市首相に対して、ホルムズ海峡に自衛隊を派遣するように要求するのではないか、また高市首相がその要請を受けるのではないか懸念されていた。しかし、憲法9条が歯止めとなり、アメリカの始めた戦争に日本が巻き込まれるという危機は免れた。

しかし、今の日本は憲法9条を死守するだけで十分だと言える状況ではなくなっている。武器取引反対ネットワーク[NAJAT]代表の杉原浩司さんは、こう話す。

「イランのホルムズ海峡に自衛隊を出せないという意味で、憲法9条にはすごく大きな意味がありました。けれども、ただそれは部分的な歯止めにしかなっていない。もはや、憲法9条が残っているから安心だと言っている状況ではなくなりました」

他国に加害をしない、という「不戦」を誓ったのが憲法9条の柱だったはずなのだが、昨今、憲法9条を空洞化させようとする動きが激しくなっているからだ。

日本政府は2022年末、戦後の安全保障政策を大転換した。相手のミサイル発射拠点をたたく「反

撃能力（敵基地攻撃能力）」の保有などを含む「安保3文書」を閣議決定。これにより防衛装備品の輸出が大幅に緩和され、武器の製造は“金儲け”ができる産業になってしまったのだ。

しかも、日本政府は4月21日、武器輸出のルールを定めた「防衛装備移転三原則」とその運用指針を改定した。これまでは、殺傷能力のある武器（完成品）の輸出に関しては、「5類型」— ①救難、②輸送、③警戒、④監視、⑤掃海といった「非戦闘・非殺傷」の目的に限って許可してきたが、今回、その「5類型」を撤廃した。

「安全保障」「防衛」など耳当たりの良い言葉を並べて、日本も、人間を殺傷する武器を売る「武器ビジネス」で“金儲け”をする「死の商人」国家の仲間入りをしたことになる。日本で製造された武器が誰かの命を奪うかもしれない今、憲法9条を守ると同時に、「武器を使わない・使わせない」運動が求められる。

「武器ビジネス」に従事する企業は「死の商人」というレッテルを張られるのを嫌がっている。そのため、NAJATなどが中心となって、抗議活動を続け、効果を上げている。

武器を持てば、本当に国を守れるのか？ それは武器大国イスラエルが自ら答えを出している。高性能の武器を持てば持つほど、“敵国”も武器の性能を上げ、戦争は際限なく続く。そしてイスラエル兵の自殺が増え、戦禍によって多くのイスラエル国民が不眠を訴え、それに伴い家庭内暴力・アルコール等の依存症も派生している。

既に日本には、隣国に届くようなミサイルが配備されている。さまざまな武器大国の現実が、私たちの未来の姿になるのだろうか。「武器ビジネス」に加担する企業への抗議や、憲法9条を守るための民主的な運動が、マスメディアも無視できないほどに盛り上がること、そして市民の連帯の輪がますます広がることを切に願う。



憲法9条への思い



3人の宗教者に、それぞれのお立場・体験からの憲法9条への思いを伺いまとめました。

^{たけだ たかお}
武田 隆雄さん（日本山妙法寺僧侶）

国文学者の中西進先生は、著書『^{なかにしすすむ} 令しく平和に生きるために』の中で、聖徳太子が「十七条の憲法」（604年）をつくった経緯を書いています。

その前年まで日本は朝鮮の新羅と泥沼の戦争を続けていて、大勢の兵士が亡くなるなどの理由で軍を引き上げ、終戦宣言を出します。その翌年に発布されたのが「十七条の憲法」。その第一条は終戦による「平和宣言」だったのだと説明しています。

1946年に発布された平和憲法も、日本が大戦に負けた後にできた「平和宣言」。歴史は繰り返されると言いますが、核戦争が始まったらもう「平和宣言」をしている場合ではなくなります。憲法9条は仏教徒としても、いろいろな人にとっても守らなければならないもの。イデオロギーを抜きにして、「憲法9条を守ろう」という声を高めていきたい。

^{いしかわ ゆうきち}
石川 勇吉さん（浄土真宗報恩寺住職）

僕の親父は戦争に駆り出された一人でした。内地に派遣され、岩国(山口県)で終戦を迎えました。敗戦後、親父は愛知に帰るため、山陽本線に乗車。原爆で線路が破壊されていたから、^{こい}己斐(現・西広島)駅で下ろされました。広島に原爆が投下されて間もない1945年8月16日のことです。被爆した人々の皮膚が垂れ下がり、助けたくても触れることもできないほどの凄惨な状況。親父は軍を除隊されたときに与えられた水筒と乾パンと毛布を、その人たちの前に置いてくることしかできなかった、と。

僧侶だった親父は戦前、大政翼賛会の役員をしていて、とにかく地域の若者を立派な軍国青年に育て上げ、戦地に送り出すことに誇りを持っていました。愛知に帰ってきたら、自分が戦地に送り出した若者の位牌がいっぱい並ぶ光景を目に。そして広島で見たあの惨状。親父は、己の弱さと釈尊の教えを裏切っていたことを深く恥じました。己を責める父の姿は忘れることはできません。憲法9条は、その親父を励

ますもの。僕はその姿を見て育ってきているから、やっぱり戦争っていうのは、どんな理由があろうとも、とりわけ坊主が協力するなんてことはあってはならない。それは僕の親父から学んできたこと。だから、今、この危うい状況に対しては声を上げざるを得ないです。

^{たいら あいか}
平良 愛香さん（日本基督教団牧師／

平和を実現するキリスト者ネット）

戦後、憲法9条ができたのに、米軍基地が沖縄に残った。今でも沖縄には「憲法9条がない」と言われています。だってそうですよね。軍隊を持たないといったのに、なぜ沖縄に基地があるのでしょうか？ 沖縄に軍隊があるということは、基地被害に苦しむということだけではなくて、沖縄から出発した軍隊が他国の人々を傷つけるということ。つまり沖縄が加害者になるということでもあるのです。憲法9条というのは、「戦争の放棄」をして、加害者にならないということなんです。

だから「憲法9条があるから大丈夫だね」ではなくて、実際にそれを守ることが必要になっていく。教会では政治の話をするとうりかかるとあるかもしれないけれども、教会の中にも、平和を求めている人、憲法9条を守ろうとしている人がいるわけですよ。もし仲間が見つけれないとしたら、それは、私たちがそれを話題にしないからでしょう。拒絶されるかもしれないけれども、語り続けましょうよ。その時に「ああ、同じ思いだった」という人がきっと見つかる。そして仲間が2人3人と少しずつ増えていく。

今は、国会議事堂前に何万人もの市民が集まって声を上げるレベルになっていますよね。おかしいことに報道されないのですが、平和を望んでいるのは、私たちだけではありません。こんなに仲間がいる。自分が語っていくことで仲間が増えていくんだと思っています。



ことばを紡ぐ～言葉で遊ぶ

ペンネーム「旅をする象」

「ロービジョン・ブラインド川柳コンクール」というイベントがある。

今回で8回目を迎えたこの大会は、厚生労働省、文部科学省をはじめ66の団体が協力し、3500句余りの応募があった。コンクールの趣旨は、「見えない人、見えにくい人の人的・物的環境を整備し、見える人とのバリアを取り除いて、共生社会を築くためのヒントを川柳という皆が気楽に詠めるものを通して提示する」ということです。

- 募集する部門は三つあって、① 視覚、色覚に障がいのある方部門
② 医師、訓練士等のメディカルトレーナー部門
③ ご家族、友人知人等のサポーター部門 に分かれています。

過去の大会における印象深い句として、「**皆が空 飛べたら私 障がい者**」という句が紹介されていました。眼科の医師が作られた句で「私が空を飛べなくても不自由を感じないようなエレベーターやエスカレーターとかの社会インフラが整備されていればよいだけですが」とコメントされていました。障がいの「社会モデル」という考え方だそうです。

今回の大会で印象に残った句を紹介します。

① 部門 「指先が震える点字のラブレター」

率直な気持ちを表現する文字には、さぞ心も指先も震えることでしょう。

お付き合いを始めた彼女と文通されているそうです。

② 部門 「手をかさず そばで見守る 出来るまで」

手伝える距離にしながら敢えて手を出さない。

その方を信じて、見守っている姿勢が伝わってきますね。

③ 部門 「乗車するまでは私がホームドア」・・・

白杖を持つ人にとって、電車を待つホームは怖いですね。ホームドアの全国における普及率は10%程度ようです。まだまだ人的なサポートは必要な環境ですね。大阪はホームも混み合っているし、幅も狭いし。



今回の句で、私が身につまされた句を最後に紹介します。ロービジョンの方の作品で、日本眼科医学会を受賞しています。「**大丈夫 声で見えてる あなたの笑顔**」

視覚障がいのある方は、声のトーンからその時の相手の感情や表情を測っています。声で今は笑顔なんだと分かるということは、声でああ今日は機嫌が悪いんだとか、面倒だと思っているなとかもわかってしまうということです。



視えてないのだからこちらが何か他事をしていても、スマホの画面を見ながら返事をしていてもわからないだろうというのは大きな間違いと気づきました。心の眼はすべてお見通しなのですから。



ビスカルド^{あっこ}篤子

こども基金から心配ごと

シナピスこども基金ではアフガニスタン現地の極貧家庭への援助を続けています。一つは西カブールの母子家庭へ小麦

と薪と油を配る運動です。これはJASA（日本アフガニスタン支援の会）を通して現地の小学校の教師たちが活動を続けています。

もう一つの現地カウンター・パートは、シナピス・マダール（シナピスお母さんの意）です。代表のアリさんは、カブールのみならず、山岳地帯の集落やバーミヤン、ヤカオランといった奥地にまで範囲を広げて極貧家庭を訪問し、少額の現金を手渡す活動をしています。

4月下旬、アリさんから2度ほど着信がありました。取り損ねた私は数日間返信をせずに放置していました。5月に入ってアリさんに電話をかけましたが全く音信不通となりました。

「難民の乳幼児を助けようキャンペーン」で、2人の乳幼児のいのちが繋がりました！

5月中旬、ある難民の家族にやっと住民登録のできる在留許可がありました。それまでは国民健康保険にも入れず就労も禁止されていたので、親たちは人に頭を下げて援助を乞うしかありませんでした。特に大変だったのは、赤ちゃんの必需品を買うお金がなかったことです。シナピスにも若いお母さんから「助けて下さい」とたびたびSOSが届きました。私たちはその都度おむつやミルクを用意し、細々と援助を続けました。

難民の乳幼児たちに出会って約一年。やっと在留許可がおりたのです。こどもたちのパパは「就労可」と印字された在留カードを手に早速職探しを始めました。ママは役場に行って子ども手当ての申請をしました。

働いて日々の糧を得る。この当たり前が許さ

何日もつながらないので心配になっていたところ、5月23日、SNSを通じて、アリさんの娘からメッセージが入りました。

「パパがタリバンに捕まり拷問を受け今も牢に入れられてる」「なぜ捕まったの」「ハザラ民族の理由。5~60人のハザラ民族が捕まった。昨日、一度だけパパから電話があった。ひどく怪我をしている。篤子さんに伝えてと言って電話が切れた」

アリさんの挨拶はいつも「篤子さん、サラーム（平和を！今日も生きていますよ）。私はアリさんからの電話を取らなかった自分を悔やんでいます。

・・・「主よ、今日一日の糧を今日お与えください。」平和のない国に生きる人たちの祈りの言葉は重いです。今日のアリさんを二の次に回したら、明日には会えなくなる。戦地にいる人だけではない、私たち誰もがそんな時空のなかに生きていることを痛感しています。

れないと、人間らしさを失いますし、何より脆弱な乳幼児から生命維持が脅かされます。栄養失調に陥っても医療にかかれず住まいも確保できないなど、先進国にあってまるで難民キャンプ暮らしのようです。

シナピスで緊急支援を呼びかけたところ、予想をはるかに超えたカンパが集まりました。取り急ぎ乳幼児への救援物資に援助金を使うことができました。そして今やっと両親に就労許可が出たので、あとはこどもたちの両親が頑張るでしょう。

皆さんのおかげでこどもたちの命が繋がりました。難民の家族から「日本の皆さん、ありがとう！」の声が届いています。感謝！



私は平和の道具

I am an Instrument of Peace

思い出し Remembering
ともに歩み Walking Together
守る and Protecting

いよいよ平和旬間・月間が近づいてきました。
7月1週目に開催される企画だけ、「シナピスの風」(教会
掲示用)に掲載しましたのでごらんください。
それ以降の情報は、7月の教区報でご確認ください。
シナピスの事務局に眠るDVDのリストを作成しました。
さまざまなジャンルの作品が揃っています。何をしようかと
まだ決めかねている教会の皆さん、ぜひご相談ください。
平和旬間・月間事務局(シナピス) ☎06-6942-1784



南山大学(愛知県名古屋市の第5
回「人間の尊厳賞」にビスカルド篤
子副センター長が選ばれました。

こちらのQRコードから授賞
式と記念講演の様子がご覧い
ただけます。⇒ ⇒ ⇒



写真提供/南山大学

シナピスホームカフェ おやすみの お知らせ

いつもシナピスカフェに訪問していただき、
ありがとうございます。
諸事情により、カフェの開催をしばらく
おやすみすることになりました。
カフェを可愛がっていただいているみなさまには
ご不便をおかけいたします。
再開時期は未定ですが、またお知らせいたします。



「ニュースレター配布停止」、「点訳版の郵送」をご希望の
方はシナピスにご連絡ください。☎06-6942-1784

あとがき

事務局の隣の部屋は難民移住者の作業室。ぱらつきはあっても3~4名の難民さんたちが毎日やってきていた。ニュース
発送の時は、日本人ボランティアも加わり、賑やかにやって
きた。そんな日常が、先月あたりから大きく変化している。
1人だけの日や、誰も来ない日までである。みんな元気にやっ
ているのか、電気のつかない部屋を見て思い出す。

のとボランティアで活躍し、優しい人当たりが印象的なイ
ラン人の青年も事務局に来なくなった一人。働けるビザを持
つ彼は、関東に移動して、頑張っているらしい。イランに残
した両親が心配で、両親は一人息子の帰国を待ちわびている
らしい。コロナ禍に留学ビザで来日した彼は、コロナに翻弄
され、今は戦争に道を塞がれている。

外国人を差別し排斥する、吸うに堪えない空気が日本中に
充満する中で、高市政権は、人の生活より、「国防」に関心が
あるようにしか見えない。縁の下を支えてくれている外国人
たちの姿が見えなくなり、政府に反対する人の声や姿が消さ
れる先にあるのは?

まだ手遅れではないと信じて、シナピスの役割、教会の社会
活動のネットワーク作りに励みたい。(ゆうじ)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への 働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



- 公共交通機関ご利用の場合
JR 森ノ宮駅より 約1000m
地下鉄中央線森ノ宮 2番出口より 約800m
JR 玉造駅より 約1000m
地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1番出口より約800m
- 車でお越しの場合
阪神高速 13号東大阪線法円坂出口
法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区
代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス
代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

